

イギリス系海外銀行進出以前のイラン金融史

——アミーノッザルブとラリ商会——

水 田 正 史

目 次

- I 問題の所在
- II イランにおける貨幣問題と幣制改革
- III ヨーロッパ系マーチャントバンカーとイラン
 - A イラン研究におけるラリ商会, 非イラン研究におけるラリ商会
 - B イギリス=ロシア間貿易をイランが「媒介」することによる綿製品市場の拡大
 - C イランの絹とラリ商会
 - D イギリス=イラン=ロシア=イギリス間貿易の存立の理由と決済の詳細
- IV アミーノッザルブによる銀行設立運動
- V 結 語

I 問題の所在

西暦19世紀¹⁾, イランの社会・経済は「西洋の衝撃」によって大きく変容した。綿製品をはじめとしてヨーロッパ製品が大量に流入したため、生糸やケシ(アヘン)といった輸出商品の生産が増大していくことになった。

1870年代頃からは、イランにおけるヨーロッパ人の利権獲得の動きが目立つようになってくる。1889年には、ロイター通信社の設立者が、イラン政府から獲得した利権によってペルシャ帝国銀行 (Imperial Bank of Persia, Bānk-e Shāhan-shāhi-ye Irān) という名のイギリス系海外銀行を設立した。この銀行はイラン

1) 暦については、本稿ではヒジュラ太陰暦やヒジュラ太陽暦ではなく西暦を用いることとする(末尾の参考文献の発行年についてはこの限りではない)。以下「西暦」を省く。

における独占的発券銀行であった。翌年には、割引貸付銀行（の前身、Учётно-ссудный банк, Bank-e Esteqrāzi）がロシア人によって設立された（なお、ペルシャ帝国銀行設立の前年には新オリエンタル銀行 [New Oriental Bank Corporation] がイランに進出しており、これがイランにおける最初の「近代的な」銀行である）。

こうした、イギリス人やロシア人のイランへの金融的進出についての研究は、ある程度の進展 (Jones [28] など) が見られるものの、未だ不十分といわざるをえない。また、イギリス系海外銀行進出以前のイラン金融史については、研究はさらに乏しい。すなわち、19世紀イラン金融史研究は緒についたばかりという段階なのである。

本稿では、イギリス系海外銀行進出以前の時期を中心に、ペルシャ語史料や英語史料を用いて、イランの金融をめぐる諸問題を描き出すことにしたい。具体的には、当時のイランの代表的企業家にして造幣局長であったアミーノッザルブ (Hāji Mohammad Hasan Amin-e Dār al-Zarb [Amin al-Zarb]) という人物²⁾に焦点を当て、議論を展開していく。ギリシャ・イギリス系マーチャントバンカーであるラリ商会 (Ralli Brothers)³⁾との関係をはじめとする、この人物の多方面での活動を明らかにすることにより、世界経済においてイランが占めていた位置を、かなりの程度、鮮明に浮かび上がらせることができるのではないと思う。

II イランにおける貨幣問題と幣制改革

イランへのヨーロッパの銀行の進出は、19世紀末葉になってからのことであった。それまでのイランには「近代的な」銀行は存在せず、大商人やサッラーフ (sarrāf) と呼ばれる伝統的金融業者が貸付や割引などの業務を行なってい

2) この人物については下記を参照のこと。Afshār [4] ; Bāmdād [9], vol. 3, pp. 348-362; Enayat [15] ; Mahdavi [29], [30] ; Mo'tazed [31] ; 嶋本 [40]。

3) 本稿では、煩雑さを避けるため、このマーチャントバンカーを「ラリ商会」と総称することとし、店舗毎の商号の違いといった点には、原則として、立ち入らないこととする。なお、店舗毎の商号の違いについては Chapman [10], p. 37を参照のこと。特にイスタンブール店、タブリーズ店に関しては, Gilbar [21], p. 353; Issawi [24], pp. 101, 104, 107をも参照のこと。

た⁴⁾.

貨幣の質は地方によってまちまちであった。1877年までに造られた貨幣は勘定が難しく、秤量は論外という状態であった。各地方の有力者はそれぞれ地元で造幣所を持ち、毎年ロイヤルティーを支払い操業していた。テヘランとハマダーンとの間ではケラーン (qerān, 当時のイランの通貨 [の1つ]) の価値の開きは17%にも達した。

銀価低落問題、通貨の質の悪化 (deterioration of the currency)、それに貿易収支の逆調によりケラーンの価値は、1860年代初頭以降に関する限り、趨勢的に低下した (Rabino [37], pp. 28-39)。

このような幣制の混乱を正すための改革が、幾度か試みられた。1863年には、ダヴースト (Davoust) という人物が、造幣所を管理するために、テヘランに招かれた。彼はいろいろな形の抵抗にあい、結局、何事もなすことができないまま、7年後イランを去った。1875年には、オーストリア (人)⁵⁾の造幣官吏ペハン (Pechan) が通貨改革の仕事に任された。彼は、仕事に取り掛かるや、銀貨の造幣は先送りして大量の銅貨を造幣するよう命じられた。また、彼が銀貨の質を高めるために必要な資金を要求したところ、拒否され、さらには、混ぜ物 (alloy) を混入するようにとの考えを示された (Rabino [37], p. 37)。

1879年にペハンが去った後、アミーノッザルブなる人物 (イラン人) が有力者アミーノッソルターン (Āqā Mohammad Ebrāhim Amin al-Soltān)⁶⁾の推薦によって造幣局長になった。

アミーノッザルブは、当時、最も成功したイラン人企業家と見なされていた。工業分野での活動もさることながら、その主な活動は、銀行業と外国貿易の分野においてであった。彼の銀行業は、トウマーニーヤーンズ (Towmāniyāns, братья Туманянц) やジャムシーディーヤーン (Jamshidiyān) に匹敵する規模

4) サラーフ (sarrāf) については, Floor [20] が詳しい。

5) オーストリア (人) ではなくプロシア (人) とするものもある (Сеидов [39], p. 75)。

6) この人物についてはさしあたり Amanat [6] を参照のこと。

を有した。外国貿易の分野では、彼は、ロシアへの綿や羊毛の輸出、マルセイユへの絹の輸出、インドからの茶とショールの輸入、イギリスからの綿製品の輸入などを行っていた。また彼は、マンチェスターの綿工場、パリの絹工場、マルセイユのガラス工場と砂糖工場の株式を所有していた。こうした彼の世界的な活動は、西ヨーロッパ、ロシア、インド、オスマントルコ帝国に置かれた代理人の広大なネットワークによって支えられていた (Enayat [15], p. 951)。

イラン駐在イギリス外交官 (Acting Oriental Secretary, His Britannic Majesty's Legation, Tehran) によって編纂された機密文書では彼は以下のように紹介されている。

アミーノッザルブは「そのすべての利得を、80年代にペルシャ⁷⁾を銅の補助貨幣で溢れさせることによって獲得した。ペルシャ帝国銀行は彼をペルシャで最も裕福な人物であると見なしていた」(Churchill [12], p. 7)。

1870年頃からケラーンの対ポンドレートは急落した。イランは元来は複本位制の国であった。しかし、1850年代60年代を通じて、金準備のほとんどを失ってしまった (Avery and Simmons [8], p. 2)。

この金流出についてはそれほど多くのことが知られているわけではない。

まず、国際収支についてであるが、史料的制約により断片的なデータに基づいた推論とならざるをえないが、簡単にまとめれば以下のようなになる。貿易収支は、世紀前半においては輸出が輸入をほぼカバーしていた (インドに対する赤字をトルコ、ロシア、中央アジアに対する黒字が相殺) が、1860年代以後、貿易

7) イランとペルシャについてであるが、一般的には「イランのことを昔はペルシャと呼んでいた」といった受け止め方がされているようだが、これは必ずしも正しくない。ペルシャとは他者からの呼び方であり、イラン人は自らの国をイランと呼ぶ (岡崎 [33])。したがって、本稿では、イランという呼称を用いることにする。但し、原文に Persia, Persian などの語が用いられている欧文史料を訳出し鉤括弧で括って引用する場合などには、ペルシャという語を用いることもある (ペルシャ帝国銀行 [Imperial Bank of Persia, Bānk-e Shāhanshāhi-ye Irān], ペルシャ語)。

また、イスタンブールとコンスタンチノーブルについてであるが、これはイランとペルシャとの関係とは問題が異なるが、同様に処理した。

なお、イスタンブール、イラン、テヘランは、日本での慣用的な表記に従うこととし、イスタンブール、イーラーン、テヘラーンとはしなかった。

全体 (overall trade) についてかなりの赤字が見られるようになった。貿易外収支 (balance on invisible items) について述べることはまったく不可能とってよいが、おそらくそれは、貿易収支の赤字をカバーするほど大きなものではなかったものと思われる。したがって、第1次世界大戦に先立つ50年間、イランからかなりの正金が流出した (Issawi [24], p. 70)。

次いで、ヨーロッパ諸国とイランとの間の金銀比価の違いを指摘することができる。当時、金銀比価はヨーロッパ諸国では1対15.5ないし16であったのに対し、イランにおいては、1対14であった。

このようなイランからの金流出には、外国商人が関与していた。「いくつかの外国の大商社はイランから金を輸出する目的でテヘラン、タブリーズなどに支店を設立した」という。これらの商社の内、最も有名なものとして挙げられるのが、ラリ商会とカステリ (Castelli) 商会であった。「彼らは大量に銀をイランに持ち込み、金を外に出した」⁸⁾。

ここで、イランからの金輸出に外国商人が関与していたことを確認することができた。そして、その外国商人の中にラリ商会の名を見いだすことができた。この世界的に有名なマーチャントバンカーの名を手掛かりにして、以下、世界経済におけるイランの位置づけを探っていくことにしたい。

Ⅲ ヨーロッパ系マーチャントバンカーとイラン

A イラン研究におけるラリ商会、非イラン研究におけるラリ商会⁹⁾

ラリー族はギリシャ人の住むキオス (Chios or Khios) 島 (アナトリア半島沖) 出身であった¹⁰⁾。ギリシャ人は何世紀にもわたって、東地中海の貿易を支配し

8) Nasiri [32], p. 12. なお、ヨーロッパ諸国における金銀比価の数値についてであるが、ここでは、この史料に記されている通り、変更を加えずに記した。「当時」の「ヨーロッパ諸国」という漠然とした表現なので、この数値が正しいとも間違っているとも断定できない。

9) ここで「イラン研究と非イラン研究」とは、「ベルシャ語史料の利用をも踏まえたものとそれ以外のもの」といった程度の意味での区分であり、あくまでも便宜上の表現に過ぎないものであることを念のためお断りしておきたい。

10) ギリシャ語の固有名詞の片仮名表記については、当時のギリシャ語についての知識が要求されることはいうまでもないが、これは筆者の現在の能力を越える問題である。

ていた。18世紀末までには彼らはトルコ領全土で貿易を行ない、マルセイユ、ナポリ、アンコナ、ベニス、トリエステ、ウィーン、ブダペスト、ロシア領黒海沿岸にコロニーを持っていた。18世紀においては、彼らギリシャ人は、フランス商人、イギリス商人の現地代理人（local agent）として活動した。そして、18世紀から19世紀への世紀の変わり目においては、フランス革命とそれに続く戦争を契機として、彼らギリシャ人はイギリス貿易とフランス貿易において徐々に大きな役割を占めるようになった。なぜなら、フランス商人が舞台から去り、他方、イギリス商人が、フランスの封鎖を打破するために、ギリシャ人の助力を求めたからであった。1815年までにはレヴァント貿易の5分の3がギリシャ人の手中に収められるようになっていた。

イギリスとの直接貿易にすでに従事していたギリシャ人が、ロンドンで地歩を固め、ロンドンを拠点として業務を推進しようとし始めたのはこの頃であった。

1818年、ラリー族の5兄弟の内の2人がロンドンに到着した。ラリ2兄弟は、ラリ・アンド・ペトロコキノ（Ralli and Petrocochino）という商号でロンドンで商売を始めた。そして、1826年、もう1人の兄弟パンティア（Pantia）が加わり、ラリ・ブラザーズ（Ralli Brothers）へと商号が改められた。彼らに引き続き、同じくキオス島の、ロドカナキ（the Rodocanakhis）、スカラマンガ（the Scaramangas）、スキリZZイ（the Schilizzis）といった一族も（ロンドンに）来た。これらの一族の内いくつかは、マルセイユとコネクションを持っていた。

1820年代を通じて、イギリスに居住するギリシャ人が行なった貿易は、主としてイスタンブールとイズミル（スミルナ）とのものであった。そして、1830年には、すでに彼らはロシア領黒海沿岸諸港に地歩を固め、イギリスへ獣脂と亜麻仁を輸出するようになっていた。

1840年代になるとギリシャ系イギリス人（Anglo-Greeks）がイギリスの商業界の注目を集め始めた。この頃までに彼らのイギリスへのそしてイギリスからの貿易における業務の規模は目ざましい拡張を遂げていたのであった。彼らは、

南ロシア、ルーマニア、バルカン諸国、エジプト、アビシニア、イラン、インドなど、広大な地域で活動を繰り広げていた。

このように事業が拡大したのは、レヴァントからの穀物輸入とレヴァントへの綿製品輸出の重要性が増大したためであった。

西ヨーロッパ、特にイギリスとフランスとは、1840年代、黒海と地中海の小麦にますます依存していった。ロシア領黒海のみならず、ルーマニア、トルコ、エジプトが小麦の新たな供給地となった。そして、この新たな供給地は、西ヨーロッパと中央ヨーロッパにおける旧来の供給地の不足分を補った。ギリシヤ人はこの成長しつつあった貿易と結びついていたのであった。1852年に地中海からイギリスに輸入された穀物は、ほとんどすべて彼らの手を経ていたといわれる。

また、この1840年代というのは、イギリスからの綿製品輸出が急増した時期でもあった。この急増の背景には、アジアにおける市場の拡大があったことはよく知られているが、これに大きな役割を果たしたのが、ほかならぬ、ギリシヤ人なのであった (Fairlie [17], pp. 263-270)。

この時期のラリ商会の活動の中心は、以上に見た通り、イギリスとレヴァント (および黒海沿岸) との間の貿易であったが、その活動範囲は、これらの地域にとどまらず、イラン、インド、アビシニアといった地域にまで及んでいた¹¹⁾。これら (イギリスとレヴァント以外) の地域において、彼らはいかなる活動を行っていたのであろうか。本稿での論旨との関連では、特に、イランにおける (あるいは、イランをめぐる) 活動について知りたいわけであるが、この

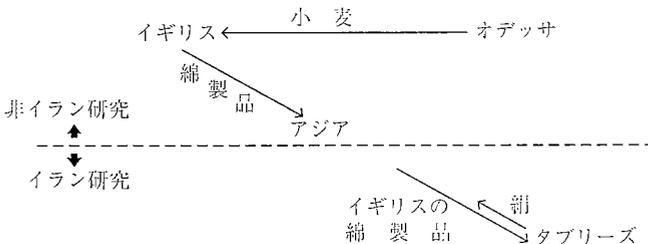
11) インドにおけるラリ商会については下記に言及されている。Chapman [10], pp. 60, 128 (邦訳112, 244ページ); 伊藤 [26], 49ページ; Tomlinson [42], p. 503.

また、ベルシャ帝国銀行の取締役およびアングロ・ベルシャ石油会社 (Anglo-Persian Oil Company, Sherkat-e Naft-e Engelis o Irān, 現在のプリティッシュ・ペトロリアム [BP, British Petroleum Company Limited]) の取締役会長を務めたチャールズ・グリーンウェイ (Charles Greenway) はラリ商会に勤務した経験があるとのことであるが、これがいかなる意味を有するのか、すなわち、この事実の背後にイランとラリ商会との何らかの関係が隠されているのかといった点については不明である (Corley [13], p. 315, Ferrier [18], p. 691, [19], p. 639; Jones [28], pp. 364-365)。

点については、ここで参照した諸研究は多くを教えてくれない。

それでは、イランにおけるラリ商会の活動の詳細について何も明らかになっていないのかといえば、そうではない。この問題については、イラン（史）研究者の手で、これまでかなりのことが明らかになっているのである。それを約言するならば、絹の生産・輸出とイギリス綿製品の輸入ということになるであろう（詳細は後述）。しかし、イラン研究者による研究では、こうした、絹の生産・輸出とイギリス綿製品の輸入が、ラリ商会によるイギリス＝レヴァント間貿易とどのような関係にあるのかといった点については、何も明らかにされていないといってよい。換言するならば、イラン研究者は、ラリ商会のイランにおける活動を、その世界的活動の文脈の中に、十分には位置づけていないのである。また、前述の通り、ラリ商会はイランからの金輸出にも関与していたが、この点についても、十分な研究が行なわれているとはいえない（第1図）。

以上のように、ラリ商会についての研究で、非イラン研究とイラン研究とは、相互に研究成果を学びあうことは、これまでなかった。もし、これら両研究分野が相互に研究成果を学べば、これまで解明されることのなかった点を明らかにすることができるかもしれないし、あるいは、そこまでいかなくとも、既知の事柄に、新たな意味づけを行なうことができるかもしれない。このような観点に立って、以下、両研究成果の総合を試みることにしたい。



第1図 イラン研究におけるラリ商会、非イラン研究におけるラリ商会

B イギリス = ロシア間貿易をイランが「媒介」することによる綿製品市場の拡大

19世紀、ロシアに対するイギリスの貿易収支 (commodity balance of trade) は赤字であった。この赤字の少なくとも一部は、結論から述べるならば、イギリスのトルコとイランへの黒字によって埋め合わされていたのであった。もちろん、ある地域に対して入超であり、他の地域に対して出超である場合、地域別という垣根を取り払えば、それらの数値が相殺されるということは自明であって、ここにあらためて述べるまでもないことであるが、ここでこのように述べるのは、このような意味のみにおいてではなく、以下の諸点をも考え合わせた上でのことである (Fairlie [17], pp. 334-335, 367-383)。

第1に、イギリス = ロシア間の貿易収支はイギリスの入超、イギリス = トルコ・イラン間のそれはイギリスの出超であることは上述の通りであるが、ロシア = トルコ・イラン間のそれはロシアの入超であった¹²⁾。

第2に、黒海からの小麦輸出貿易に従事していた商人が、トルコ、イラン、中央アジアにおいても、さらにはインドにおいても、活動していたという事実を挙げることができる。

第3に、ロシア領黒海沿岸諸港からイギリスへ小麦を運ぶ船は、黒海へと向

12) ここではトルコとイランとが一括して取り扱われているが、トルコ、イランそれぞれについての対イギリス、対ロシア収支が明らかにされなければならないことはいうまでもない。19世紀イランの対外貿易については、史的制約により、その全体像が明らかになっているとはいえない。ここではさしあたり下記の諸点を指摘するにとどめたい。

19世紀のロシア = イラン間の貿易収支は、1830年以降について見た場合、ほとんどすべての期間、イランの出超であった (Entner [16], pp. 8-9; Сеидов [39], pp. 36, 53)。

対イギリスについてであるが、イラン全体の対イギリス貿易収支の長期間にわたる統計は、本稿で取り扱っている時期に関しては、管見の限り、存在しない。タブリーズを経由する対イギリス貿易収支に関しては Issawi [23], pp. 25-27, [24], p. 114を参照のこと。

なお、1840年11月16日付のイギリス外交文書によれば、タブリーズはイランの貿易全体の4分の1ないし3分の1程度を占めていた (Issawi [24], p. 108)。また、1850年代60年代には、タブリーズ = トラブゾンルート (註14参照) はイランの貿易全体の5分の2程度を占めていた (Issawi [23], p. 24)。

19世紀イランの対外貿易全般を扱った邦語で発表された研究としては後藤 [22] がある。

かう際には、途中イスタンブールまでの積荷（そのかなりの部分は石炭¹³⁾）を積んでいた。

第4に、イギリスの、イランへの織物輸出の決済とロシア領黒海沿岸諸港からの小麦輸入の決済との間に直接的な結びつきが存在した。具体的には、1863年にオデッサにもたらされた金貨銀貨のほとんどが、イランからイスタンブール経由でもたらされたロシアの金貨銀貨 (Russian gold half imperials and silver roubles) であった。そして、これらはトラブゾン (トレビゾン) 経由でイランにもたらされたイギリス製品の代価として送金されたものであった¹⁴⁾。この貿易は、ギリシャ系イギリス人の手中にあり、なかでも、ラリ商会が大きなシェアを占めていた。彼らは、オデッサとアゾフ海沿岸に店舗を有していたので、ロシアの農産物を返荷貿易 (return trade) としてイギリスへと船積みするのにきわめて有利であった。ロシアの貨幣がイランにもたらされたのは、おそらく、イランからロシアへの輸出品に対する支払としてであった¹⁵⁾。

以上の諸点から考えて、イギリス = レヴァント間貿易とイギリス = イラン間貿易とは、切りはなして考えることのできないものであったと判断してよいであろう。あるいは、言い換えるならば、イギリス = レヴァント間貿易として捉

13) 1830年代を通じて、黒海と地中海の諸港における石炭の消費が増大した。これは、主として、諸政府による蒸気船航路の開設の結果であった。イギリス = イスタンブール = オデッサ間の船の積荷は以下の通り (Fairlie [17], pp. 334-335)。

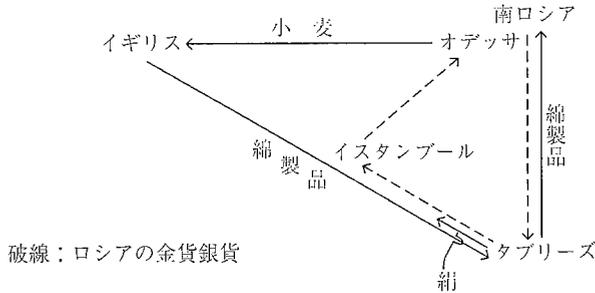
イギリス — (石炭) — イスタンブール — (バラスト) — オデッサ — (小麦) — イギリス。

同上博士論文の別の箇所では、穀物輸入の返荷 (return cargo) として、織物が挙げられている (Fairlie [17], pp. 382)。

また、チャップマン博士 (Dr. Stanley D. Chapman) はイギリスからの返荷として、綿織物と綿糸と石炭 (cotton piece goods, yarns or coal) を挙げている (Chapman [11], p. 127 [邦訳242ページ])。

14) 19世紀イランの対外貿易を考える上で決定的重要性を持つものとして、イラン西部の都市タブリーズと黒海沿岸のトラブゾンとを結ぶ貿易ルート (タブリーズ = トラブゾンルート) の問題がある。このルートの「開設」あるいは他のルートからこのルートへの転換をもたらした要因の1つとして、イギリスがより短い貿易ルートを求めていたことがあったとされる。輸送費が削減されれば、イギリスの商品の流入が容易になるのみならず絹その他のイランの産出物の輸出が可能となる。詳細については Issawi [23] を参照のこと。

15) イギリス = ロシア間貿易全般に関しては、ベテルブルグなど北ロシアを経由するものをも考慮に入れなければならないことは言を俟たない。



第2図 イギリス=イラン=ロシア=イギリス間の貿易と決済
—— イラン研究と非イラン研究の総合 ——

えられていたものは、実は、イギリス=イラン間貿易，イラン=ロシア間貿易，ロシア=イギリス間貿易の3つから成り立っていたのである（第2図）。

それでは、イランからの絹輸出はこの文脈の中でどのような位置を占めているのであろうか、以下、検討していくことにしたい。

C イランの絹とラリ商会

19世紀前半、カージャール朝の国内統一による政情の安定と国外における生糸の需要増に刺激され、イランの養蚕業はカスピ海沿岸地方を中心に発展した（岡崎 [34]，70ページ）。生糸と絹製品は当時のイランの輸出品目の第1位を占めていた¹⁶⁾。

「絹はヨーロッパとの通商を維持するための主要資源であった。そして、それは、西洋への輸出に利用することのできる、大量に生産された唯一の価値ある品目」なのであった¹⁷⁾。

16) Issawi [24]，p. 136；岡崎 [34]，72ページ。イランからヨーロッパへの絹輸出については杉山 [41] をも参照のこと。

17) Abbott [1]，p. 59。

下記にも同趣旨の記述がある。Abbott [2]，pp. 499-500；Abbott [3]，p. 1696；Jones [27]，p. 961。

生糸生産の拡大には輸出商人たちが大きな役割を果たした。当時、生糸の生産と取引に関して、以下に述べるような慣行があった。まず、商人が地主に無利子で現金と蚕卵紙を前貸し、収穫の3分の1を受け取るという契約を結んだ。地主は現金と蚕卵紙を農民に与え、収穫の内、商人の取り分を除いた部分を、農民と折半した。つまり、これは、商人、地主、農民が収穫を3等分するというものであった。この方式はモサーラセ (mosâlase) と呼ばれた。モサーラセは商人と地主にとってたいへん有利なものであった。商人はこれによって集荷を確実にしえたのみならず、蚕卵紙の前貸しの対価として収穫の3分の1という大きな取り分を手にすることができた。地主は農民に桑畑を貸し付けるだけで、出費もリスクもなしに、収穫の3分の1を得ることができた (Gilbar [21], p. 352; 岡崎 [34], 72ページ)。

先に簡単に触れたように、このような、絹の生産と輸出にラリ商会が大きく関与していた。ラリ商会が1830年代中頃、タブリーズに店舗を構えた時、その主要な業務上の目標は、イギリスの綿製品の販売を拡張することにあった。そして数年の内に、ラリ商会は、タブリーズ=トラブゾルルート (註14参照) を通じてのイギリスからの綿製品の輸入のかなりの部分を扱うようになったが、イランの金貨銀貨を国外に流出させることをイラン政府が禁じたため、輸出商品としての生糸に着目したのであった (Gilbar [21], p. 353; Issawi [24], p. 99; 岡崎 [34] 73ページ)。

このように、イランの絹は、イギリスからの綿製品の輸入に対する見返りの輸出商品として位置づけられるものなのであった。綿製品の輸入のみならず絹の輸出にもラリ商会は大きく関与していたのである¹⁸⁾。

なお、ここに引用した史料では、イラン政府がイランの金貨銀貨の流出を禁じたとあるが、これは、前述の、ロシア→イラン→イスタンブール→オデッサというロシア貨幣の流れとどのような関係があるのであろうか。この点について

18) 絹輸出においてラリ商会が果たした決定的重要性は、「ラリ・ブラザーズ」(Ralli Brothers) が「絹貿易を創造した」(created the silk trade) という表現からも読み取ることができよう (Jones [27], p. 961)。

ては以下の記述が興味深い。

「コンスタンチノーブルから供給される資本をリカヴァーするためにラリのタブリーズ店は絹、生糸、ルーブルをその見返りに発送した。後者は、税関当局がペルシャのコインの輸出を禁じているためである」(Issawi [24], p. 107).

1864年頃をピークに、生糸の生産は激減した。1865年には輸出量は対前年比57パーセントを記録した。1856年にフランスのローヌで発生した微粒子病(pebrine)がイランにまで達したのがその原因であった。それに加えて、1870—71年には、イランの南部および東部が飢饉に見舞われ、大きな打撃を受けた。多くの商社が「ペルシャ貿易」(Persian trade)から手を引いた。ラリ商會が撤退したのもこの頃であった¹⁹⁾。

イランからの絹の輸出は、イギリス=イラン=ロシア=イギリス間貿易の中に、このような形で位置づけることができるものなのであった。

D イギリス=イラン=ロシア=イギリス間貿易の存立の理由と決済の詳細

次に、この貿易がイギリス=オデッサ間の2地点間貿易ではなくトルコとイランを経由する形を取った理由について、さらに、これと関係することと思われるが、貿易決済の詳細について、検討していくことにしよう。

前者については、以下の3点を指摘することができる。

まず第1に、イスタンブールについてである。この都市は、オスマントルコ帝国の首都であり、大きな人口(1830年代40年代:37万5000人, 1890年代:90万人)を有する大都市であった。東地中海あるいは中近東における一大中心地としての位置をこの都市が占めていたことを見逃してはならないであろう。

イスタンブールの貿易は18世紀から19世紀前半にかけては大幅な輸入超過であった。たとえば、1840—45年平均では、この地の輸出は500,000ポンド、輸入は2,000,000ポンドであった。「輸入品は首都およびその周辺での消費のみに

19) Jones [27], p. 961. この飢饉については岡崎 [35] を参照のこと。

ちなみに、オデッサからの撤退は1860年代のことであった (Fairlie [17], p. 397)。

絹輸出衰退以降のタブリーズの貿易については坂本 [38] を参照のこと。

使われるのではなく、大部分はトルコ奥地、そしてペルシャ、グルジア、チェルケスなどの外国へと送られた」。さらに、イスタンブールからイランとロシアへの通過貿易 (transit trade) も存在した (Fairlie [17], p. 381; Issawi [25], pp. 34, 87, 113-115)。

また、この都市が、地中海と黒海との結節点に位置していたという点も念のため申し添えておきたい。地中海と黒海との間の貿易はイスタンブールまでとそれ以遠との2つの段階に分けられて取り扱われることがよくあったという (Fairlie [17], p. 347)。

第2に、関税率の問題である。1828年のトルキヤマンチャーイ条約 (トルコマンチャイ条約) により、イランとロシアの間の関税率は5%と定められた。この低関税率を利用して、ヨーロッパの商品が、ロシアの製品と対抗すべく、イランの商品の名のもとにロシアに流入した。長い間、タブリーズはロシア領コーカサスへの再輸出によって繁栄したのであった (Entner [16], p. 13)。具体的には、たとえば、イギリスから輸入したキャラコ (grey calicoes) をタブリーズで裁断し、青く染め、イラン製品としてロシアへと発送するという事例を、イギリス領事報告が伝えている (Dickson [14])。

第3に、タブリーズからロシアへの密輸出が相当な額に達していたことも注目される。上記のイギリス領事報告によれば、密輸出は合法的な輸出とほぼ同額であった。密輸出品にはイギリスの捺染布 (British prints) も含まれていた。

次に、貿易決済の詳細についてであるが、ラリ商会の貿易決済全般についての重要な指摘がフェアリー博士 (Dr. Susan Elizabeth Fairlie) とチャップマン博士 (Dr. Stanley D. Chapman) によってなされているので、以下、紹介することにしてしよう。

すなわち、フェアリー博士によれば、ラリ商会が成功した主な理由の1つは、彼らが現金による取引 (cash business) を固守し、信用つまり「紙片」 (credit or "paper") では決して商売をしなかったことであった。「シティを周期的に混乱させる金融恐慌に際しても、ラリ・ブラザースはイングランド銀行のように、

あるいはそれ以上に確固としていた」という (Fairlie [17], pp. 275-276).

このようなビジネスを維持していくために、彼らは、輸入品がイギリスに着き次第、あるいはカーゴトレード (cargo trade) という方法でイギリスに着く前に、すばやくこれを売りさばいて現金化した。このカーゴトレードは黒海沿岸諸港とイギリスとの間の穀物貿易の発展を助けたという点で重要な意味を持つものであり、具体的には、以下のようなものであった (Chapman [10], p. 40, [11], p. 127 [邦訳242ページ]; Fairlie [17], pp. 274-275, 341, 354-355).

- ① 黒海沿岸諸港で荷積みを行なう商人は、商品を船積みし次第、イギリスにいる代理人あるいはパートナーに商品のサンプルと船荷証券とを郵送する。
- ② イギリスにいる商人は、サンプルと船荷証券を受け取るや、たとえ船がまだ到着していなくとも、それを第三者に売る。
- ③ 第三者はそれを別の者に売ることもある。このようにして商品はまだ海上にある内に2回3回と、あるいはそれ以上、人の手を渡る。商品が到着した時点で船荷証券を所有し、貨物運賃を支払い、最終的に荷渡しを受ける人物は、元来の荷受人 (consignee) とは異なる人物となるであろう。
- ④ この最終的購入者がいくつかの港の内のどの港で荷渡しを受けたいと望んでいるのかについて指示を得るために、カーゴトレードに従事している船は寄港地に寄港しなければならない。イギリスの場合、寄港地はコーク (Cork) とファルマス (Falmouth) であった。

イランとの貿易においても、前述のロシアの金貨銀貨による支払という方式以外に、このような方式が採られていたのかどうかについては不明であるが、ここでは以下の点を指摘しておきたい。

すなわち、ラリ商会はイランにおいては、現金のみでビジネスを行っていたわけではない。ラリ商会は、輸出商品の購入をファイナンスするための信用を必要とした。そのためアミーノッザルブのサッラーフ業は急速に拡張することになった。そして、この借入の多くが歳入 (state revenues) を抵当に行なわ

れたというのである²⁰⁾。

ここで、ラリ商会に信用を供与したのが、ほかならぬアミーノッザルブであったという点、そしてこの借入が歳入を抵当としていたという点に注目したい。このファイナンスが具体的にどのような方法で行なわれていたのかは明らかでない。また、アミーノッザルブはラリ商会の代理人であったといわれているが (Enayat [15], p. 951), この点についても詳細は不明である。おそらく、これらの中に、当時のイラン経済を世界経済的視野から解明する上での鍵が隠されているものと思われる。この点については今後の課題としたい。

IV アミーノッザルブによる銀行設立運動

1879年8月4日付でアミーノッザルブはナーセロッディーン・シャー (Nāser al-Dīn Shāh-e Qājār, カージャール朝第4代国王, 在位1848—1896年) 宛に銀行設立の請願書を提出した。この請願書の内容はおおよそ以下のようなものであった (Nasiri [32], p. 65)。

- ① ヨーロッパ諸国の産業の発展に銀行が大きな役割を果たしたこと
- ② イランにおける産業の発達、鉄道の建設、電信線の設置は、大銀行の設立なしには実現できないこと
- ③ 銀行は、政府と国民との共同で設立すべきであること

20) Enayat [15], p. 951.

フェアリー博士 (Dr. Susan Elizabeth Fairlie) は同上博士論文で、手形コインシステム (bill-cum-coinage system) というものを取り上げ、このシステムが、南ロシアの貿易をイスタンブールと結びつけるものであり、イランへの織物輸出によって南ロシアからの小麦輸入をファイナンスすることの背後に存在したとしている。その上でフェアリー博士は、遠く東はイランまでの貿易のために手形が使われることは、少なくともクリミア戦争前については、なかったと述べ、その理由として、上述の、ラリ商会がイラン経由オデッサまで正金を運んだという点を挙げている (Fairlie [17], pp. 391-392)。

また Floor [20], pp. 265-266には、イスタンブールの商人がイランからタブリーズあるいはテヘランのコレスポネントを通じて送金を受ける例が紹介されている。その場合、イスタンブールの商人はトビリスイ (ティフリス) に代理人を置くが必要であるという。トビリスイの代理人はイスタンブールの商人あるいはタブリーズのコレスポネント宛に手形を振り出し、それをトビリスイにおいて、ロシアの銀行券と引き換えに譲渡する。次いで、この銀行券はオデッサの銀行業者に送られる。オデッサの銀行業者はオデッサあるいはロンドンあるいはパリで手形を買い、それをイスタンブールへと送る。

その5年後、彼は、商人代表者会議 (Majies-e Vokalā-ye Tojjār, 商務に関する行政、商業上の争いの裁定、経済発展の促進を行なう) の設立運動に主導的役割を果たした。結局は、この会議も銀行も実現をみなかった。

彼は近代的技術を自らの事業に積極的に利用した。ギーラーン地方にある自分の地所に米作用の灌漑ポンプを設置したことなどはその例として挙げられよう。ラシュトには、マルセイユに向けて輸出するための絹紡糸を生産する工場(労働者、150人)を設立した (Enayat [15], p. 952)。

また、彼は、マーザンダラーン地方において鉄道建設に着手した。この鉄道は、完成し営業を開始したものの、さまざまな困難により、彼の死とともに「目に見える痕跡をほとんどとどめることなく、ジャングルの中へと姿を消した」。とはいえ、これは、イラン史上2番目に古い鉄道として、また、イラン人自身の手によるものとして、歴史的意義を持つものであった²¹⁾。

上記のような大規模な投資を行なったために、彼は、1880年代90年代を通じて通貨価値を下落させ、そのことによって蓄財したのではないかの疑いをかけられることとなった。これに対して、当時の通貨価値下落の主な原因は、1893年までは、世界的な銀価低落とイランの対外貿易のインバランスであるとの見解もある。

価値が下落したのは銀貨にとどまらなかった。銅貨シャーヒー (shāhi) の価値は、1893、94年と、着実に下落していき、それに続く2年間は急激に下落した。銅貨シャーヒーの銀貨ケラーンに対する交換レートは、公定では20対1のところ、実質は平均30対1であった。80対1を記録したこともあったという。アミーノッザルブはこの通貨価値下落から利益を得ていると見なされ、1896年12月、内務大臣により逮捕され、投獄された (Enayat [15], pp. 952-953)。

この銅貨の問題の「解決」に、上述のペルシャ帝国銀行が大きく関与した。

21) Olson [36], pp. 39, 46-47. なお、同論文によれば、1890年3月に営業を開始したとのことであるが、Enayat [15], p. 952では、1891年に完成したが一度も利用されなかったとなっている。なお、Enayat [15] がその典拠としている (と思われる) Ashraf [7], pp. 82-83にはそのようなことは記されていない。

同行は1896年のイラン政府への提案に基づき、銅貨を流通から回収した。この策は、さしあたりは効果があったように見えた。しかし、2年も経たない内に元の状態に戻ってしまった。

1899年12月、イラン政府と同行との間に合意が成立し、すべての銅貨が廃されることとなり、ニッケル貨が導入された。このニッケル貨の導入は成功であったとされる (Jones [28], pp. 81-82)。

V 結 語

筆者は、19世紀のイランの金融——さしあたりは国内金融——についての歴史的事実を整理していこうとの問題意識のもとに本研究に着手したわけであるが、研究を進めていく内に、アミーノッザルブという人物に突き当たることとなった。彼が当時のイランの金融・経済を語る上で鍵を握る人物であろうということはこの研究を始める前から、ある程度予想はしていたが、やはり予想通りというべきか、彼が鍵を握っていた。

そして、銀価低落、金流出という問題からはラリ商会という名が浮かび上がってきた。同商会はイラン史においては絹輸出と綿製品輸入でその名が知られている。金流出に関してラリ商会という具体的な固有名詞を見いだすことができたことは、研究を進めていく上での重要な手掛かりとなるものであった。

この有名なマーチャントバンカーの名を手掛かりに、その世界的活動を押さえていけばイランの世界経済における位置づけが多少なりとも明らかになるのではないかとの見込みのもと、これまでの研究をフォローし、さらには若干の一次史料を読み進めていった結果、以下のことが分かった。すなわち、ラリ商会のイランにおける活動は、イギリス＝ロシア間貿易を視野に収めることにより初めて明快に理解することができるものであるということである。これは、逆の言い方をすれば、イギリス＝ロシア間貿易はラリ商会のイランにおける活動を押さえることによって初めて統一的総合的に理解できるものであるということでもあるわけである。

この問題は綿製品の貿易という点から見れば、19世紀中頃以降のアジア市場の拡大という問題ともつながってくる。このアジアの綿製品市場の拡大においてイランがどのような位置を占めていたのか、詳細は今後の研究の進展に俟たなければならないが、少なくとも、イランが何らかの位置を占めていたことをこの研究で明らかにすることができた。このことは、これまで経済史研究においてあまり注目されてこなかったのではないかと考える。

このように、まず国内金融から見ていき、貿易へと議論を展開させたわけだが、その結果、国内金融と貿易との結節点ともいうべき論点を見いだすこととなった。それは、アミーノッザルブとラリ商会との関係という問題である。この関係の中に、当時のイラン経済を世界経済的視野から解明する上での鍵が隠されているものと思われる。これについては史料制約上、今後の課題としたい。

アミーノッザルブは晩年、銅貨の価値下落から利益を得ているとの嫌疑をかけられ、逮捕・投獄の憂き目をみた。銅貨の回収に当たったのはペルシャ帝国銀行というイギリス系海外銀行であった。同行が晩年のアミーノッザルブといかなる関係にあったか、きわめて興味深い問題であるが、この点についても、今後の課題とせざるを得ない²²⁾。

【参考文献】

- [1] Abbott, Keith, [Edward], "Report by Mr. Consul-General Keith Abbott on the Trade and Commerce of Tabreez for the Year 1866," *Great Britain, Parliamentary Papers, Accounts and Papers*, 1867-68, LXVIII [3953]. (これは Amanat [5] にも収録されている)
- [2] Abbott, [Keith] E [dward] .. "Report by Mr. Consul-General E. Abbott on the

22) このように、研究水準を大幅に高めるためには、史料制約を打破することが、是非とも必要なわけである。これまで十分に利用されてこなかったと思われる史料として、香港銀行グループ (Hongkong Bank Group, 香港上海銀行 [The Hongkong and Shanghai Banking Corporation] を中心としたグループ) 所蔵のペルシャ帝国銀行文書とマフダヴィー博士 (Dr. Asghar Mahdavi, アミーノッザルブの孫) 所蔵の文書を挙げることができよう。後者については Mahdavi [29], [30] を参照のこと。

- Trade of Tabreez for the Year 1867," *Great Britain, Parliamentary Papers, Accounts and Papers*, 1867-68, LXVIII [3953-VIII].
- [3] Abbott, [William George], "Report by Consul-General Abbott on the Trade and Commerce of Tabreez for the Year 1877-8," *Great Britain, Parliamentary Papers, Accounts and Papers*, 1878, LXXV [2134].
- [4] Afshār, Iraj, ed., "Yādgār-e Zendegāni-ye Hājī Hoseyn Amin al-Zarb," *Yaghmā*, vol. 15, no. 5, Mordād-māh 1341, zamime.
- [5] Amanat, Abbas, ed., *Cities and Trade : Consul Abbott on the Economy and Society of Iran 1847-1866*, Ithaca, London, 1983.
- [6] _____, "Amīn-al-Soltān," *Encyclopædia Iranica*, vol. 1, Routledge & Kegan Paul, London, 1985, pp. 949-951.
- [7] Ashraf, Ahmad, *Mavāne'-e Tārikhi-ye Roshd-e Savmāyedāri dar Irān*, Zamine, Tehrān, 1359.
- [8] Avery, Peter W. and J. B. Simmons, "Persia on a Cross of Silver, 1880-1890," in Elie Kedourie and Sylvia G. Haim, eds., *Towards a Modern Iran : Studies in Thought, Politics and Society*, Frank Cass, London, 1980, pp. 1-37.
- [9] Bāmdād, Mahdi, *Sharh-e Hāl-e Rejāl-e Irān dar Qarn-e 12, 13, 14 Hejri*, Zavvār, Tehrān, 1347-57 [?] .
- [10] Chapman, Stanley D., "The International Houses: The Continental Contribution to British Commerce, 1800-1860," *The Journal of European Economic History*, vol. 6, no. 1, Spring 1977, pp. 5-48.
- [11] _____, *The Rise of Merchant Banking*, George Allen & Unwin, London, 1984. (布目 真生・萩原 登 訳『マーチャント・バンキングの興隆』有斐閣, 1987年)
- [12] Churchill, George P., *Biographical Notices of Persian Statesmen and Notables, August 1905*, Office of the Superintendent of Government Printing, India, Calcutta, 1906.
- [13] Corley, T. A. B., *A History of the Burmah Oil Company, 1886-1924*, Heinemann, London, 1983.
- [14] Dickson [William J.], "Report by Mr. Dickson, British Acting Consul-General at Tabreez, on the Province of Azerbaijan, and on the Trade of Tabreez for 1859," *Great Britain, Parliamentary Papers, Accounts and Papers*, 1861, LXIII [2896].
- [15] Enayat, Anne, "Amīn (-e Dār) -al-Zarb," *Encyclopædia Iranica*, vol. 1, Routledge & Kegan Paul, London, 1985, pp. 951-953.
- [16] Entner, Marvin L., *Russo-Persian Commercial Relations, 1828-1914*, University of Florida Press, Gainesville, Fla., 1965.
- [17] Fairlie, Susan Elizabeth, "The Anglo-Russian Grain Trade, 1815-1861." Ph. D.

- Thesis, University of London, 1959.
- [18] Ferrier, R. W., *The History of the British Petroleum Company*, vol. 1, Cambridge University Press, Cambridge, 1982.
- [19] _____, "Greenway, Charles" *Dictionary of Business Biography*, vol. 2, Butterworths, London, 1984, pp. 639-642.
- [20] Floor, W. M., "The Bankers (*sarrāf*) in Qājār Iran," *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, vol.129, no. 2, 1979, pp. 263-281.
- [21] Gilbar, Gad G., "Persian Agriculture in the Late Qajar Period, 1860-1906: Some Economic and Social Aspects," *Asian and African Studies*, vol. 12, no. 3, November 1978, pp. 312-365.
- [22] 後藤 晃「19世紀イランにおける貿易の展開と社会経済構造の変容 I」『東洋文化研究所紀要』(東京大学)第107冊, 1988年10月, 179—258ページ。
- [23] Issawi, Charles, "The Tabriz-Trabzon Trade, 1830-1900: Rise and Decline of a Route," *International Journal of Middle East Studies*, vol. 1, no. 1, 1970, pp. 18-27.
- [24] _____, ed., *The Economic History of Iran, 1800-1914*, The University of Chicago Press, Chicago, 1971.
- [25] _____, *The Economic History of Turkey, 1800-1914*, The University of Chicago Press, Chicago, 1980.
- [26] 伊藤正二「インドにおける財閥の出自について (19世紀～第一次大戦)」『社会経済史学』第45巻 第5号, 1980年2月, 29—54ページ。
- [27] Jones, "Report by Consul-General Jones on the Trade of the Province of Azerbaijan for the Year 1870," *Great Britain, Parliamentary Papers, Accounts and Papers*, 1871, LXVI[429].
- [28] Jones, Geoffrey, *Banking and Empire in Iran*, Cambridge University Press, Cambridge, 1986.
- [29] Mahdavi, Asghar, "Les archives Aminozzarb: source pour l'histoire économique et sociale de l'Iran (fin du XIXe-début du XXe siècle)," *Le monde Iranien et l'Islam*, no. 4, 1976-1977, pp. 195-222.
- [30] _____, "The Significance of Private Archives for the Study of the Economic and Social History of Iran in the Late Qajar Period," *Iranian Studies*, vol. 16, nos. 3-4, Summer-Autumn 1983, pp. 243-278.
- [31] Mo' tazed, Khosrow, *Hājj Amin al-Zarb — Tārikh-e Tejārat va Sarmāyegozāri-ye San'ati dar Irān—*, Jānzāde, n. p., 1366.
- [32] Nasiri, Mohammad, et al., *Tārikhche-ye Sisāle-ye Bānk-e Melli-ye Irān 1307-1337*, n. p., n. p., n. d.

- [33] 岡崎正孝「イスラム世界とその呼称」勝藤猛・内記良一・岡崎正孝編『イスラム世界——その歴史と文化——』世界思想社、1981年、所収、2—5ページ。
- [34] _____, 「19世紀後半のイランにおける養蚕業の衰退とギーラーン地方の農業の変化」『オリエント』第27巻第2号、1985年3月、69—82ページ。
- [35] _____ [Okazaki, Shoko], “The Great Persian Famine of 1870-1871,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. 49, part 1, 1986, pp. 183-192.
- [36] Olson, William J., “The Mazanderan Development Project and Haji Mohammad Hasan: A Study in Persian Entrepreneurship, 1884-1898,” in Elie Kedourie and Sylvia G. Haim, eds., *Towards a Modern Iran: Studies in Thought, Politics and Society*, Frank Cass, London, 1980, pp. 38-55.
- [37] Rabino, Joseph, “Banking in Persia,” *Journal of the Institute of Bankers*, vol. 13, part 1, January 1892, pp. 1-56.
- [38] 坂本 勉「タブリーズの絨毯貿易」『東洋文化研究所紀要』(東京大学) 第114冊、1991年、133—172ページ。
- [39] Сеидов, Р. А., *Иранская буржуазия в конце XIX-начале XX в. (начальный этап формирования)*, Наука, Москва, 1974.
- [40] 嶋本隆光「イスラムの商業倫理（理論と実際）——12イマーム派シーア主義の場合、19世紀のイランを中心に——」『日本中東学会年報』第7号、1992年3月、221—271ページ。
- [41] 杉山伸也「幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討——ロンドン・リヨン市場の動向と外商——」『社会経済史学』第45巻第3号、1979年10月、30-57ページ。
- [42] Tomlinson, J. D., “The First World War and British Cotton Piece Exports to India,” *The Economic History Review*, second series, vol. 32, no. 4, November 1979, pp. 494-506.
- [43] Wright, Denis, *The English amongst the Persians during the Qajar Period, 1787-1921*, Heinemann, London, 1977.

【付 記】

- ① 参考文献については、ご蔵書の拝借、海外からの取り寄せ、抜き刷りのご恵与、参照すべき史料のご教示といった点で多くの方々からご指導ご厚情たまわった。特に、大阪外国語大学の岡崎正孝先生ならびにハーシュム・ラジャブザーデ先生にはたいへんお世話になった。ここに篤く御礼申し上げる。
- ② 参考文献〔1〕〔2〕の著者と参考文献〔3〕の著者とは従兄弟の関係にあった。

前者は1868年にオデッサ駐在総領事へと転任し1873年に死去した (Amanat [5] pp. v-vii, xxviii-xxix; Wright [43] pp. 79-81, 98).